

機動歩兵連隊奮戦記

千葉県 古川 文吉

昭和十七（一九四二）年一月十日大阪集合、騎兵第十四連隊の初年兵ばかり約八百人が「タキア」の暗号で呼ばれた。大阪城で武器を受領。

広島まで客車輸送され、宇品で乗船した。

私は第一乙種合格で、検査官から「馬はどうだ」と聞かれた時「牛を飼っています」と返答したので騎兵になったのだと思った。

私の家は自作農で梨の栽培を一家六人で営んでいた。長男が私で、あと妹が三人だった。

朝鮮釜山から客車輸送で助かった。行く先不明だったが不安はなかった。防寒具を大阪で貰い、背負い袋、戦闘帽を身に付ければ行く先は寒いところだと覚悟した。

列車はやがて砂漠地帯に入り青いものは一切目

に入らない。蒙古だった。包頭という街が終着駅だった。連隊本部は包頭から西方二〇〇キロの安北にあった。

騎兵第十四連隊第二中隊が私の部隊だ。連隊長は渡部富士雄大佐、第二中隊長は野溝中尉が直属上官になる。

包頭は北支の北京から西方にあり、途中で張家口という街があるが、見渡す限り砂また砂で、春先になると砂柱があちこちに立上り、やがて黄砂となつて海を越えて日本にも黄色い空をもたらすようになる。

新兵到着で古年兵は嬉しそうな顔を見せているが、油断は禁物。

兵舎は二階建てで暖房はストーブだった。この近くに炭鉱があるそうでオンドルも石炭を焚く。照明はランプで掃除や手入れは初年兵の役目である。

水はどこからくるのか不自由は少しも感じな

かったから水源は豊かだったと思う。

古年兵は四年兵までいるのには意外だった。世話する初年兵は大変だ。

訓練は専ら歩兵の教練だった。

名前は騎兵だが馬はおらず、代わりに貨物自動車
の外国製（シボレー、フォード）の古い車があった。車の運転は専門の兵隊がいて、我々は乗せて貰うだけだから、歩兵でも歩かずにすむので、これは大いに助かったと思った。

一個分隊十五人が一台の車に乗り、軽機一、擲^{てき}弾筒^{だんちゆう}一、あとは三八式歩兵銃が武器のすべてである。

古年兵の出身地は四年兵が長野、栃木、三年兵が東京、千葉、山梨、二年兵が神奈川、千葉で、下士官は長野出身が多かった。

古年兵の襟章は立襟かと思つたら、もう全部が折襟で、昔のような萌黄色の立襟は見られなかった。

我々初年兵の一期の検閲が終わる頃になって、四年兵が満期除隊になって姿を消したが、これが日本陸軍の最後の満期除隊になるとは誰もわからなかった。

朝の点呼前には必ずロープの綱引きでトラックを回してエンジンを始動させるのが日課だった。

食事用の食缶はアルミ製なので食缶返納時の清掃が楽なものには助けられた。洗濯は冬でも物干し場に干したが、何日もかかった。冬は外に出る時は必ず防寒具を着用し、帽子の耳だれを下ろしてないと耳が凍傷になった。防寒具を被る前に必ず毛糸で編んだ頭巾を着用した。

手も軍手を着けてから防寒手袋を着けた。脚は巻脚絆に革靴だったから整列しても腳踏みをしていた。

寒気が酷しいと演習は中止になった。

一期の検閲が終わると特業教育が始まり、初年兵はそれぞれ特技を修業するため隊から離れて行く者が多い中、私は小銃、それも狙撃手教育を命

ぜられ、隊に残留することとなり、衛兵勤務等で忙しかった。

そのためか作戦に出ると指揮班に入れられ、初の戦闘では中隊長の伝令として勤務した。

昭和十八年になると、戦車第三師団が新しく編成され、騎兵第十四連隊は機動歩兵第三連隊と名称が変わり、吉松喜三大佐が着任された。

私は第六中隊に配属され、一選抜の上等兵になり、初年兵の教育助手となり、千葉、埼玉、栃木、群馬出身の初年兵を教えた。

今まで騎兵連隊には軍旗があったが、今度の編成では軍旗を返納することとなり、四月に旗手が東京に返しに行った。新しい機動歩兵連隊には何故か軍旗の授与はなかった。

昭和十九年三月、河南作戦が始まった。

戦車第三師団長、山路秀男中将、機動歩兵第三連隊長は吉松喜三大佐。第二大隊長は平泉少佐、第六中隊長は高田中尉の指揮の下、出動、石家荘

に集結すべく貨車輸送で出発した。

黄河を工兵が架けた舟橋で渡り、許昌、鄭州、郊県と南へ進撃した。途中、車上から徒歩行軍の兵隊にタバコをやったら非常に喜ばれた。私らは装具は勿論、私物に至るまで一切が車に乗っているの、これ以上の楽はない。

昭和十九年五月二日、郊県の戦闘で、敵の城壁上からの射撃は猛烈を極め、城内に突入できず、高田中隊長が敵の手榴弾の破片で臀部に受傷する等、我が方の損害大であった。

私は高田中隊長を背に負って介抱する。その後、臨時野戦病院に通院加療する。私はその都度介添え役を務めた。

この郊県の戦闘で、我が第二大隊は山路師団長から賞詞を受けた。

大隊副官、第六中隊長（高田中尉）、機関銃中隊長、第八中隊長（第三大隊）、連隊砲中隊長の四中隊長が負傷し、それぞれ代理に交替、その他に小隊長以下の損害多数に及んだ。六中隊だけで

も六人が戦死した。

目標は洛陽だが、手前にある龍門街は石仏で有名なところだが、この高地は全部岩山で極めて急峻な斜面で、頂上には径五〇メートルもある砦があった。勿論戦車は使いものにならない。敵はこの高地に大軍を集めて洛陽防備の第一戦に固めていた。

機動歩兵第三連隊は、この龍門街奪取を命ぜられ、三日間の昼夜を分かたぬ激戦の末奪取したが、この戦鬪で戦死者は将校六人を含め六十一人、負傷は将校七人を含め、百四十一人の大きな犠牲を出した。

次いで息つく暇もなく七里河の激戦が始まった。

五月十一日、龍門街を出発。七里河の敵を撃破して洛陽攻撃を命ぜられた。

敵前一五〇〇メートルで下車し徒歩前進中に、大隊本部は敵迫撃砲の集中砲火を浴び、平泉第二

大隊長は重傷を負い、栗原副官戦死、そのほか数人の負傷者が出た。

大隊は歩・戦・砲の密接な協同のもとに七里河対岸の敵を攻撃したが、本道の橋は落とされ、対岸は断崖をなしており、幅三〇メートルの河を挟んで一晚中撃ち合いが続いた。

十三日、大隊は迂回して洛陽城の西門を攻撃し、城内に突入したが、敵は猛烈に反撃して来た。

我が占領した家の屋根を敵が破って手榴弾を投げ込むなど、彼我土壁を隔てて激しい市街戦が展開された。

折から雨が降り出し、真っ暗闇の中で敵は家屋に火を放ち、その焰に照らし出され壮絶な市街戦となった。敵兵力は極めて多く、わが突入部隊も苦戦にさらされた。

第二大隊長代理の加藤大尉は城外における第一大隊に救援を依頼したが断わられた。

十四日四時頃、各大隊に撤退命令が出たが、第

二大隊は城内に戦死者の遺体と重傷者が残っている。連隊長は再び攻撃を命じ、十一時頃、城内に突入、遺体と重傷者を救出した。

この戦闘では、将校三人を含む四十二人が戦死を遂げられた。洛陽攻撃後、一個中隊が一個小隊しか編成できない程戦死、負傷者が多かった。

昭和二十年三月、老河口作戦に徒歩で参加、途中で反転、在支米空軍が谷底スレスレに來襲、その後、移動は夜間に限られた。

八月中旬、停戦命令が出て、車は北京に集結となり、兵隊を残して出発、おかげで私物は積んだまま北京へ、そのまま行方不明になった。

日本が負けたと言われても、我々兵隊は負けた感じは一切なく、狐にだまされたとはこういう感じか。許昌で鉄道警備についているうち貨車に乗せられ北京に着き、南苑飛行場で日本人居留民の護衛に当たると。

武装解除はなかった。帰国するため塘沽でフリ

ゲート艦に乗る時に武器を置いて来た。

昭和二十年十二月六日夜、三年ぶりに帰宅した。突然の帰宅に家のものが吃驚するやら大喜びで迎えられた。